

## 外国人日本語学習者の日本語発音不安

著者	小河原 義朗
雑誌名	言語科学論集
巻	3
ページ	13-24
発行年	1999-12-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/30715">http://hdl.handle.net/10097/30715</a>

## 外国人日本語学習者の日本語発音不安

小河原 義朗

キーワード：日本語発音不安、インタビュー調査、発音不安場面、学習段階、発音指導

### 要旨

教師が事前に日本語発音指導・矯正場面における学習者の発音不安を把握するための「日本語発音不安尺度」開発を目指す。準備段階として、まず学習者の発音不安を具体的に把握するためにインタビュー調査を行った。その結果、学習者は学習段階に応じて大きく4つの場面で、各場面に特有の要因に基づいて発音不安を感じていることが判明し、各場面及び来日前後の学習開始から初・中・上級と段階に応じた横断的・縦断的調査の必要性が示唆された。

### 1. 目的

近年、日本語教育における音声教育の重要性が盛んに主張され、その認識はほぼ定着したと言える。日本語音声教育において何を教えるべきかに関する音声研究は韻律面を中心に多くの研究がなされ、同時にそれらをどのように教えるかに関する効果的な発音指導法の開発研究も見られるようになった。しかし、そのような指導法を実際のクラスに具体的に導入していく際の学習者側の問題点についてはあまり検討されていない。例えば、クラスにおいて発音指導や発音矯正の際には、発音不安から極度の緊張状態に陥る、恥ずかしがる、矯正を拒絶するといった学習者が見られることがある。一度拒否反応が出てしまうと発音指導の継続に支障を来すだけでなく、学習者の発音学習に対する動機づけやクラスの雰囲気にも悪影響を及ぼす危険性がある。しかし、そのような発音不安といった学習者の

日本語発音学習に影響を与える社会心理学的な要因についての研究があまり進んでいないことから、その対処法については「心にとめて教室に入るのがよい」(大坪・水谷, 1971 など)というにとどまり、これまであまり検討されてこなかった。

そこで、本研究では、教師が事前に日本語発音指導・矯正場面における学習者の発音不安を把握するための「日本語発音不安尺度」の開発を目指し、まず尺度のための項目収集を目的としたインタビュー調査を行い、そのデータに予備的検討を加えることを目的とする。ここでの「日本語発音不安」とは、Leary(1983)の対人不安の定義をもとに、「現実の、あるいは想像上の日本語発音場面・発音指導場面において、日本人・教師・クラスメートなどの他者からの発音評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安」と定義する。

## 2. 方法

まず、尺度項目の選定のために、学習者はいつどのような発音不安を感じているのかについて具体的に把握する必要がある。そこで、東北大学への留学生 25 名に対して個別に 20～30 分のインタビュー調査を行った。留学生の出身は、中国、韓国、台湾、マレーシア、タイ、アメリカ、ブルガリア、モンゴル、オーストラリアで、中上級レベルの日本語学習者である。インタビューでは、学習者が日本語を学習し始めた時期から現在に至るまで、母国及び来日後、日本国内でどのような発音指導を受けてきたのか、そしてそれに伴ったクラス内での発音指導・発音矯正場面、さらにクラス内外での日本人あるいは外国人との日本語によるコミュニケーション場面など、様々な日本語発音場面において、感じたこと、思ったことについて訊ねた。

## 3. インタビュー調査の結果と分析

以下、本稿では学習者に対するインタビュー調査の結果について報告する。

まず、発音不安が生じる場面として、大きく以下の 4 つの場面に分類された。

しかし、発音不安が生じる学習者はこの 4 つの場面すべてにおいて同じように

発音不安が生じる4場面

場面(1) : 母国での日本語クラスにおける発音・矯正場面

場面(2) : 日本国内での日本語クラスにおける発音・矯正場面

場面(3) : 日本国内での日本人とのコミュニケーション場面

場面(4) : 日本国内での外国人とのコミュニケーション場面

不安を感じているわけではなく、各場面で異なる傾向がみられた。そのため、発音不安の尺度項目を考えるにあたっては、4つの場面をそれぞれについて下位尺度を構成するように検討する必要がある。

また、発音不安の生起に関わる要因について、4つの場面に各々特有の要因がみられた。以下、4つの場面ごとに発音不安に影響を及ぼすと考えられる要因を挙げ(表1~4)、インタビューの中からその具体的なコメント例を引用する。表中の( )内の数字は関連するコメントをした学習者の人数を示す。

3. 1. 場面(1) : 母国での日本語クラスにおける発音・矯正場面

表1にあるように、来日前、母国での日本語クラスにおいて、日本語で発音したり、発音指導・矯正されたりする場面で、発音不安について最も多く言及があったのは、クラスメートに自分の発音を聞かれることで恥ずかしさを覚えるといった「①他者の存在」(例:「みんなが見てるから恥ずかしい。もうやりたくないと思った。仕様がなから続けた」「みんなの前で恥ずかしい。一生懸命言う通りにやった。ちゃんとやりたいけど、正しく発音できるまで繰り返した。とつても恥ずかしくて、いやになった。もうやりたくない。周りのみんなの評価が大事

表1 場面(1)での発音不安要因

発音不安が生じる要因	発音不安が生じない要因
①他者の存在(8)	①発音に対する向上心(13)
②自己比較(8)	②みんなできない(4)
③原因帰属(5)	③クラスメートとの距離・雰囲気(4)
④発音改善スキルの欠如(5)	④他者評価の高さ(2)
	⑤発音の非重要性(11)

だから。3・4回繰り返すと恥ずかしくてみんなに馬鹿だと思われる」と、自分の発音能力がクラスメートよりも低いのではないかと不安になり比較するといった「②自己比較」(例:「他の人と発音能力を比較した」「あの人は自分より発音が下手かどうか気になる」)による不安であった。特に下線部のコメント例にもあるように、教師の指導が学習者の動機づけに悪影響を及ぼしていることから、教師が事前に学習者の発音不安を把握し、指導の程度を配慮する必要がみられる。

また、「②自己比較」によって自分の発音がクラスメートより下手であると考え、不安を感じているが、その理由を自分の発音能力以外に求める「③原因帰属」(例:「発音が上手な人は羨ましい。自分もなりたいが、それは多分頭が良いから。それから、勉強する時間が多いからだと思う」「日本語のクラスでは発音の指導がないし、ときどき矯正されるだけだからあまり上手になれない」「先生が私たちの不安な気持ちを考えてくれなかった」)や、その自分の下手な発音をどうやって上達させればいいのか、発音改善のためのスキルを持っていないことで不安を感じる「④発音改善スキルの欠如」(例:「先生に言われてがっかりした後は何もできない、何をすればいいかもわからない」「どうやって発音すればいいのか、ルールがないし、わからないことを何回も言われても何もできない」「どうやって勉強すればいいかわからなかった」)が挙げられた。

一方、発音不安が生じない理由として最も多かったものは、少しでも発音がうまくなりたいといった「①発音に対する向上心」(例:「一人ずつの発音矯正でも全然恥ずかしくなかった。もっといい発音ができるように、日本人と同じ発音になりたいと思った」「先生からの矯正は恥ずかしいとか不安は全くなく、ありがたいと思った」「うまい人を見るともっとがんばろう、同じようになりたいと思った」)であった。このような学習者は先の発音不安要因である「②自己比較」の結果を逆にプラスに捉えていることがわかる。その他、初級段階では誰でも下手であるとする「②みんなできない」(例:「初めは誰がうまいかもわからない」「みんな初めはよくわからないから笑うことはなかった」「みんな初めてだし、みんないっしょだから、お互い直したり助けたりする」)や、クラスメートとの距離が

近く、雰囲気も良いことから不安を感じないという「③クラスメートとの距離・雰囲気」(例:「笑っても笑われてもみんな気にしなかった。下手な人も先生に聞いていた」「仲が良かったから全然恥ずかしくなかった」)が挙げられた。そして、当然ながら、自分の発音能力が高いと評価される「④他者評価の高さ」(例:「クラスメートよりも発音が上手であると先生に評価された」)が挙げられた。

また、発音不安の有無に関わらず、発音はあまり重要ではないとする「⑤発音の非重要性」が多く言及されたが、その理由として母国ではあまり発音指導がなかったというコメントが多くみられた。このことから、来日前の発音指導の有無がこの発音学習に対する重要性意識、さらには発音学習に対する動機づけにも影響するものと考えられる。

### 3. 2. 場面(2): 日本国内での日本語クラスにおける発音・矯正場面

来日してから、日本国内での日本語クラスにおいて発音したり、発音指導・矯正される場面(2)で、発音不安要因として多く見られたのは、表2にあるように場面(1)と同じ「①自己比較」(例:「クラスで自分だけできない」「他の学習者と同じ発音ができないことがかなりストレスになっていた。日本語をやめようかと思った」)と、「②発音改善スキルの欠如」(例:「できれば直したいが、どう勉強したらいいかわからない」)であった。特に「①自己比較」では「下手だから話したくない。競争である。初めは同じなのにコンプレックスになる。自分よりうまいか下手か比較する」「初めはみんな同じレベルだし、クラスでの発音矯正も

表2 場面(2)での発音不安要因

発音不安が生じる要因	発音不安が生じない要因
①自己比較(10)	①発音に対する向上心(4)
②発音改善スキルの欠如(7)	②下手な人の存在(3)
③自信喪失(4)	③他者評価の高さ(2)
④自尊心(3)	④できなくて当然(2)
⑤教師の指導(3)	
⑥クラスメートとの距離・雰囲気(2)	

勉強だからいいと思ったが、少しずつ差が出てきていやになった」など、段階に応じて発音能力にレベル差が現れることにより、発音不安に言及する学習者が見られることから、段階に応じた発音不安を把握する必要性が示唆される。

また、場面(1)から母国でのクラスではあまり発音指導がなく、あまり発音の重要性を感じていない傾向が見られたが、来日後初めて教師に指摘され自信をなくしてしまう「③自信喪失」(例:「教師に注意されて発音を意識するようになったが、自信をなくした」)、そして他国の学習者に笑われることで自尊心が傷つけられる「④自尊心」(例:「自分は下手だから変な発音をして周りの外国人に笑われるのがいやだ」「国のプライドがあったし、下手だと言われたらいやだし、国のイメージが落ちる」)など、場面(1)とは異なり、出身国の異なる学習者クラスでの特徴が現れている。さらに、これまでになく発音に厳しい教師や発音の繰り返しを要求するといった「⑤教師の指導」(例:「みんなの前で発音が下手なことを指摘され、とても恥ずかしくてショックを受け、いやになった」)が挙げられ、「⑥クラスメートとの距離・雰囲気」(例:「クラスの人と親しくないから、一人で発音矯正されると恥ずかしかった」)が場面(1)とは逆に不安要因として挙げられた。

このように場面(2)では、母国とは異なり、クラスメートの出身国が同一ではなくなったことにより、発音不安を感じる学習者が多く見られ、発音不安に言及しなかった学習者は4名のみで少なかった。この4名は全員場面(1)と同様に「①発音に対する向上心」(例:「比較した。うまい人には自分もなりたいたいと思ったし、教えてもらった」)を挙げたが、「挑戦している感じで、先生がいいと言ってくれたらやったあ!と思った。どうやって正しく発音するのか練習から分かるとおもしろい。自分で練習しながら「感じる」ことをした。発音とは全部先生ではなく、自分が感じる事が重要である。先生は教えられない。自分で感じる事が一番大事」や「クラス以外では、テープを何回も聞いて、何回もまねした。暗記した。分からないときは先生にいつもしつこく聞いた。先生はいやがるほどだった」というように、発音学習に対して強い自律性が見られる。

また、やはり「自己比較」から自分より発音能力の低い学習者がいることで安

心する「②下手な人の存在」(例:「自分よりもっと下手な人がいるから恥ずかしくない」「クラスでは他の留学生と比較した。他の人は自分より下手だから自信があった」)、逆に自分の発音が高く評価される「③他者評価の高さ」(例:「他のクラスメートからうまいねと言われた」)が挙げられた。しかし、このような意識も「自分よりうまい学習者がいたら少し恥ずかしい」というように自分より上手であると判断される学習者が存在すればすぐに発音不安要因となることがうかがえる。その他、お互いの出身国が異なることから逆に「④できなくて当然」(例:「外国人クラスはみんな間違えるのが当たり前だから恥ずかしくない」「外国語の発音は難しいから下手なのが当然。人が下手でも気にしない」)が挙げられた。

### 3. 3. 場面(3): 日本国内での日本人とのコミュニケーション場面

次に、クラスから離れ、日本国内での日本人との日本語によるコミュニケーション場面において、発音不安が多く見られた要因としては、場面(1)(2)と同様に「①発音改善スキルの欠如」(例:「日本人と話して通じなかったとき、どうしてわからないのか考えた。でもどうやって勉強するかわからなかった」)がみられ、クラス内外を問わず、発音改善のためのスキル・トレーニングの必要性が示唆される。特に、初級段階だけでなく「日本人に通じないことがあり、自分でも発音が原因であるとわかる。その時は、意識しながら言い直したり、言い換えたりした。自分で何回もそれを練習した。それでもだめだったり、今でもだめなときは

表3 場面(3)での発音不安要因

発音不安が生じる要因	発音不安が生じない要因
①発音改善スキルの欠如(8)	①発音に対する向上心(6)
②自信喪失(7)	②評価の欠如・誉める日本人(8)
③コミュニケーションの不通(7)	③コミュニケーションの成立(3)
④聞き返しに対する不安(7)	④発音の非重要性(3)
⑤誤解に対する恐れ(4)	⑤他者評価の高さ(3)
⑥経験不足(3)	
⑦発音能力の低さ(2)	

いやになるし、もうだめだ、直せないと思う」「行く?」とかイントネーションで伝わらないと、いらいらする。自分の間違いはわかるけど、どうすればいいのかわからない。言い換えればもちろんすむけど、日本語らしくない。不自然。ジレンマ状態」というように、中・上級と学習が進み、日本人との日常的なコミュニケーション場面でのコメントが多く見られた。

また、日本人に自分の発音に通じないことで、これまであまり意識していなかった自分の発音に対して自信を失ってしまう「②自信喪失」(例:「初め一年めで通じなかったときは逃げた。できれば日本人の中に入りたくなかった」)が見られたが、そのような来日直後での「②自信喪失」だけでなく、「日本人に変な発音、不自然な発音と言われてとてもがっかりした。たくさん勉強したのに発音はだめ、最初からやる必要がある。今となってはどうしようもない」「日本人に通じないときがあった。発音が原因。アクセントとか。そのとき、もっと勉強しよう、努力しなきゃと思った。3年もやったのにまだこの程度かとがっかり、焦る、心配になった」「大学の講義で50%もわからなかったし、話が通じなかった。そのときとても不安になった。今までやってきたのに全然できないから」というように、ここでも上級段階になってからの言及が多く見られた。このことから、上級になって発音の重要性を再認識することになるが、下線部のコメントにもあるように上級段階での学習困難性の問題が生じていることが示唆される。

場面(3)の特徴として「③コミュニケーションの不通」(例:「日本人がなぜわからないのかいらだった」「自分の言うことは正しいと思っていたのに、日本人がわからないときとても恥ずかしい」)、「④聞き返しに対する不安」(例:「日本人に聞き返されたときは恥ずかしい。特に、明らかに相手のせいではなく、自分の発音に問題があると分かったとき」)が見られた。しかし、逆に「日本人と話して通じないから重要だと思った」「日本人に聞き返されるのがいやだから、正しい発音を身につけたい」というように問題が生じたことで初めて、また学習が進んだ段階で改めて発音の重要性に気づいたというコメントがここでも見られた。

その他、先の「②自信喪失」につながるものとして、誤解されたことによって

動機づけにも影響を及ぼす「⑤誤解に対する恐れ」(例:「タクシーで誤解から日本人に発音の間違いを指摘され、すごくショックで、しばらく話したくなくなった。一生忘れない」)や、まだ来日直後で日本人とのコミュニケーションに慣れていないことに起因する「⑥経験不足」(例:「初めは経験がないから、日本人と話すこと自体が不安だった」「来たばかりのときは日本人と話すときは恥ずかしかった」)も指摘された。そして、当然のことながら、「⑦発音能力の低さ」(例:「自分の発音はうまくないので、あまり話さない」)が挙げられた。

一方、発音不安が生じない要因としては、やはり「①発音に対する向上心」が挙げられ、「来日直後は目標をクラス内の上手な学習者に置き、次に日本人と発音を比較するようにした。そのとき、まだまだだと思ったが、もっと頑張ろうと思ひ、落ち込まなかった」というように非常に自律していることがわかる。そして、「日本人と話しても恥ずかしくなかった。通じてうれしくなった」「日本人と話すのに不安はないし、日本語で話すのが好き」「恥ずかしいとか不安はなかった。通じないときは、英語とかジェスチャーを使う。通じないから疲れるけど、もっと勉強しようという契機になった」というように発音不安要因を逆にプラスに捉えられる傾向がある。

また、発音不安の有無に関わらず発音に関する評価やテストがないこと、特に初級段階では周囲の日本人に発音を誉められるといった「②評価の欠如・誉める日本人」(例:「日本人は評価を全くしなかった」「日本では評価されることがなかったから、緊張や不安はなかった」「日本人にはいつも日本語が上手ですねと言われる」)が多く指摘されたが、「発音が気にならないのはコミュニケーションができるし、先生にも何も言われなから」というように教師の指導や評価が学習者の動機づけに大きく影響している可能性を示唆している。その他にも、「日本人は間違ってもわかってくれるから恥ずかしくない」「もちろん不安はあるけど通じるからそんなに不安はない」といった「③コミュニケーションの成立」や、それが要因となって「④発音の非重要性」が挙げられたが、「今現在は発音は大事だけでもっと文法、単語が大事。発音は自然にうまくなると思ったけど、思っ

たより進歩がない」にあるように、特に上級段階になって、場面(2)と同様に発音以外の学習項目との優先順位など、上級段階での発音の学習困難性を感じている傾向がみられた。また、「⑤他者評価の高さ」が同様に挙げられたが、「ある程度発音に自信があった。アクセントとイントネーションを除いてあまり悩んだことがない」というようにコミュニケーション上の韻律の重要性を指摘している。

### 3. 4. 場面(4)：日本国内での外国人とのコミュニケーション場面

4つめの場面として、日本国内での外国人との日本語によるコミュニケーション場面が7名から挙げられたが、発音不安が生じる要因としては全員が「①自己発音レベルの露呈」のみを挙げていた。これは「外国人と話すときは間違えるとすぐわかるし、通じないし、直されたりするから、恥ずかしい」「自分より日本語や発音ができる留学生と自分と日本人がいる場面では話したくないし、恥ずかしい。日本人と一対一なら恥ずかしくない。自分の弱点を見せたくない」「周りの人が自分よりうまいと恥ずかしいし、すごいや」というように、日本語ネイティブではない外国人の存在により、自分の発音レベルがより明確に露呈される、第三者に伝わってしまうと考えることによる不安であり、クラス内での教師による発音指導・矯正場面とは異なる特徴が示唆される。

一方、発音不安が生じない要因としては、やはり「①発音に対する向上心」(例：「他の留学生が相手だったら全然気にしない。日本人のときも気にしない。直してもらった方がうれしいから」「他の人が同じ国籍で自分より日本語がうまくてもまったく恥ずかしくない。もっと自分は勉強するべきだ」「勉強だから恥ずかしいことはない。人によっていろいろな方法がある。うまくなりたいという気持ちが重要」と、「②他者評価の高さ」(例：「他の外国人から「発音がうまい」と言われた」)が挙げられた。

表4 場面(4)での発音不安要因

発音不安が生じる要因	発音不安が生じない要因
①自己発音レベルの露呈(7)	①発音に対する向上心(3) ②他者評価の高さ(2)

#### 4. まとめと今後の課題

発音不安が生じる場面は、母国(1)・日本国内(2)での日本語クラスにおける発音・矯正場面、日本国内での日本人(3)・外国人(4)とのコミュニケーション場面の大きく4つに分類された。この場合に、同じ学習者でも、各場面に関係する要因が異なり、この関係は学習段階によっても異なるため、発音不安は様々に変化する。しかし、それぞれの場面に特有の要因は見られるものの全体としては、発音不安を強く感じる学習者ほど、他の学習者の発音と自分の発音とを比べる「自己比較」や、他者からの評価をそれ以外の要因よりも重視し、発音改善のためのスキルが身につけていないことからくる不安を抱えている傾向があると言える。

逆に、発音学習を「楽しい」「勉強である」と捉え、発音不安要因である「自己比較」の結果を発音の向上への契機として捉えられるなど、発音学習に対する動機づけが高く、自律性・主体性が明確な学習者ほど、ほとんど発音不安を感じておらず、発音矯正が「喜び」であり、発音指導の不足を不満に感じている。このことから、発音学習への自律性を高めるような指導が必要であり、それが発音不安解消の一手段となると考えられる。

しかし、こうした自律性に影響を与える「発音学習に対する重要性意識」は、時系列的に「低→高→低→高」のN字曲線のように変化している傾向がある。すなわち、母国ではあまり発音指導がなされない→そのため、来日前は発音の重要性について判断できない(低)が、来日して自分の発音が十分通じないため、発音の重要性に気づく(高)→しかし、日本でも発音指導や評価が不十分であり(谷口, 1992 など)、さらに一般の日本人が誉めるだけで正確な評価をしないことから、発音学習に対する動機づけやその重要性意識が次第に低下していく(低)→上級段階になって、日本人評価が厳しくなる(岩男・萩原, 1989; 小河原, 1993)、あるいは社会生活上十分な発音能力が要求されることから、その重要性に改めて気づき、発音学習に対する動機づけが再び上昇する(高)という変化である。そして、上級段階になってしまうと、コミュニケーション上の意志疎通は発音が多少下手でも支障がなく、「今さら発音指導されても仕方がない」「もっと語彙を増やしたい」

というような意識が強くなり、さらに発音上の化石化から発音矯正も困難になる。

よって、発音指導の時期としては学習者の動機づけが高い「来日直後」が重要であると言える。その際、学習者の動機づけを低下させることなく、発音指導を有効に導入し、それを効果的に継続して行うためには、事前に発音学習における学習者要因として、学習者個別の発音不安を教師が知っておくことが指導上の助けとなると言える。そこから、例えば発音不安をあまり感じず、発音学習に積極的な学習者を中心にクラス活動を検討する、発音不安の強い学習者にいきなり発音矯正を行って、動機づけに悪影響を及ぼすことを避けるなどの方法が考えられる。そのためにも、学習者がいつどのような発音不安を感じているのかについて、容易に判断可能な「日本語発音不安尺度」の開発が求められていると言える。

以上から、各場面・学習段階における発音不安を把握するためには、学習者がいつどのような発音不安を感じているのかについて、各場面と、来日前後の学習開始時期から初・中・上級と段階に応じた横断的・縦断的な調査が必要であると考えられる。なお、来日前の学習者を対象にした質問紙調査については既に調査を行い、現在分析中であるが、その結果については別稿に譲ることにしたい。

付記：本稿は小河原義朗(1999)「外国人日本語学習者の日本語発音不安尺度作成の試み(1)」(『日本教育心理学会第41回総会発表論文集』p.458)に加筆・修正したものである。

## 引用文献

- 岩男 寿美子・萩原 滋 1988 『日本で学ぶ留学生－社会心理学的分析』勁草書房
- M.R. Leary 1983 *Understanding Social Anxiety: Social, personality, and clinical perspectives*. SAGE. (生和 秀敏(監訳) 1990 対人不安 北大路書房)
- 大坪 一夫・水谷 修 1971 『日本語教育指導参考書 I 音声と音声教育』文化庁
- 小河原 義朗 1993 「外国人の日本語の発音に対する日本人の評価」『東北大学文学部日本語学科論集』3, pp. 1-12.
- 谷口 聡人 1991 「音声教育の現状と問題点－アンケート調査の結果について－」『シンポジウム日本語音声教育－韻律の研究と教育をめぐって－』凡人社 Pp. 20-25.